

トルコにおける多元的宗教教育の状況とその可能性

—イギリスとの比較を通して—

宮崎 元裕

(教育学科准教授)

はじめに

世界的に見て、20世紀後半以降の社会の多文化化の進行に伴い、異文化間の相互理解の重要性が増すようになり、これに対応する形で、多文化教育・異文化間教育・国際理解教育といった教育が重視されるようになってきている。こういった教育には、文化の違いに端を発する問題を減らし、異なる文化者集団が共生していく基盤を築くことが求められている。

さらに、諸外国では公立学校における宗教教育の内容も1980年代頃から大きく変化し、宗教間の相互理解を深めることを重視する宗教教育が行われるようになってきている(宮崎, 2005年)。1980年代以前の宗教教育は児童・生徒の自らの宗教に対する信仰を深める形でなされていたのに対し、1980年代以降は他宗教について学んだり、自宗教を客観視したりすることを通して、他宗教に対する寛容性を育むことを目指す多元的宗教教育が重視されるようになったのである。こうした変化をもたらした主たる理由は、社会の多文化化の進行に伴い、自宗教について学ぶだけでなく他宗教についても学ぶことが多文化共生の観点から必要とされてきたことである。こうした諸外国における多元的宗教教育を重視する動きは、異文化間の相互理解が不可避となっている多文化時代において、非常に大きな意義を有したものである。

その一方、日本では、政教分離原則により公立学校における宗教教育は禁じられてきたことを背景に、宗教教育を巡る研究は宗教的情操教育の是非を問うものに偏っており、諸外国における宗教教育に注目した研究は非常に少ない。

このことが実は大きな問題を生じさせていたことを指摘したのが、藤原(2011年)である。藤原は、諸外国と日本の教科書の宗教に関する説明を比較分析し、これまで日本の倫理の教科書における宗教の説明は中立的な事実だけを記していると考えられてきたが、現在の諸外国の説明と比較した場合、中立的ではないどころか、特定の宗教に対して価値判断を下し、諸宗教に優劣をつけ序列化する記述になっていることを明らかにした。日本の教科書でなされているような宗教の説明は、多文化主義が重視されるようになった以降の諸外国ではもはや用いられなくなった旧態依然としたものにとどまっているわけである。こうした問題が生じたのは、日本では政教分離原則との関連で宗教教育がタブー視され、諸外国の宗教教育に対しても関心がほとんど払われていなかったことと無関係ではない。このことは、日本の公立学校で宗教教育を行うべきかどうかに関係なく、諸外国の宗教教育に関する研究を進めることがいかに重要かを示唆している。

そこで本稿では、トルコとイギリスの宗教教科書を取り上げ、多元的宗教教育の内容を具体的に検討する。トルコを取り上げるのは、イスラーム諸国における宗教教育を多元的宗教教育の観点から分析した研究がきわめて少ないからである。イギリスを取り上げるのは、多元的宗教教育の一つのモデルとなりうる宗教教育を行っているからである。ただ、本稿の問題関心はイスラーム諸国における多元的宗教教育の可能性を探ることであり、それゆえ、トルコの状況を相対化するためにイギリスとの比較を用い

ながら、トルコを中心に検討を進める。

なお、筆者はこれまでトルコとイギリスの宗教教育については、個々に論文にまとめてきた(宮崎, 2014年; 宮崎, 2013年; 宮崎, 2012年)。本稿の内容はこれらの論文と重複する部分もあるが、本稿の目的は、これらの論文を組み合わせることによって、これまで直接的には行っていなかったトルコとイギリスの宗教教科書の比較を通して、トルコの多元的宗教教育の状況と可能性を検討することである。

1. トルコの宗教教科書に見る多元的宗教教育

トルコの公立学校では、宗教教育は「宗教文化と道徳」という科目名で行われている。「宗教文化と道徳」は小学校の第4学年と中学校の全学年(第5学年～第8学年の4年間)では週2時間の必修科目とされ、高校の全学年(第9学年～第12学年の4年間)では週1時間の必修科目とされている。2012年度からは「宗教文化と道徳」以外にも、「クルアーン」「ムハンマドの生涯」「宗教の基礎知識」という3科目が、中学校・高校の選択科目として新設されている(宮崎, 2014年; MEB, 2012)。

こうしたトルコの宗教教育のなかで多元的宗教教育の要素が含まれているのは「宗教文化と道徳」である。「宗教文化と道徳」には、他宗教・他宗派との「違い」を肯定的に評価する内容が含まれている。ここでは、「宗教文化と道徳」の第8学年用教科書の中から、多元的宗教教育の要素を含む内容を引用しながら、トルコの多元的宗教教育の内容を具体的に考察する。

(1) 宗教・宗派の違いを肯定的に評価する

この教科書では、宗教・宗派の違いを肯定的に評価する内容が多く含まれている。例えば、次のような内容である。

「イスラーム思想に見られる様々な解釈は、イスラームが思想の自由を重視した結果と言える。そのため、様々な異なる解釈は、分離あるいは分裂というより、イスラーム文化の豊かさとして認識されなければならない。こういった解釈の何れに従ってしようとも、神を信じ、聖

ムハンマドが預言者であることを信じ、クルアーンを信じるならば、その人はムスリムなのである。いかなる人も自分が受け入れた解釈によって、他は教義から外れているとみなしたり、それを非難したりしてはならない。様々な解釈は宗教上の理解の相違であるから、ムスリムは皆、自分に最も相応しいものを選んでそれに従うことができる」(Akgül (新実訳), p. 79)。この記述は、イスラームに関する解釈の違い(宗派の違い)があることを肯定的に評価したものである。また、次のような記述もある。

「人間は、文化的にも、経済的にも、社会的にも絶えず変化を遂げている。社会の変化と言われるこのプロセスは、人々の思考方式、世界観にも影響を及ぼす。その結果として、人々は種々の問題に対して新しい解決の模索を求めるようになる。イスラーム学者らも、社会と民衆が宗教の上で直面している問題に対して、それぞれに異なる形で答えを見つけてきた。人間の性格、時代の要求、知識水準、社会の変化といったファクターは、イスラーム学者らがそれぞれに異なる解釈を行う状況を作り出した。こうして宗教理解上の相違が現れるようになった。これは自然なことであり、否定的に考える必要はない。なぜなら、宗教についての多様な解釈と理解は、イスラームの思想と文化を豊かにし、イスラームに様々な学問の分野が生まれる結果をもたらしたからだ。(中略)宗教理解における相違・多様性は、人々が宗教を実践する場合に多くの便宜をもたらした。地域的、社会的な条件に適した形で実践されることを容易にする解釈が試みられたのである。(中略)宗教理解における解釈の相違は、イスラームの思想と文化に豊かさをもたらした。だからこそ、絶えず変化して行く社会と宗教の絆は受け継がれたのである。クルアーンが解釈の余地を与えたテーマにおいて、それぞれに異なる理解があることは、自分たちの条件に合ったものを選べる可能性を人々に与えた。人々が各々の条件の中で宗教的な義務を果たすことを容易にしたのである」(Akgül (新実訳), p. 84)。

この記述のある頁の中央には、虹のイラスト

があり、その虹の中に「虹を飾る色彩が豊かであると感じられるように、宗教理解における相違・多様性も豊かさなのである」という文が添えられている。さらに、この単元の末尾には、「色彩の会話」という読み物が掲載されている。この読み物は、緑色・青色・黄色・橙色・赤色・紫色の六色が、お互いに自らを最も優れた色だと主張して言い争っているところに、次のような「雨」の声が聞こえてくるという話である。雨は「愚かな色たちよ。何を争っているのだ？ なぜ、優劣を争うのか？ 君たちは皆お互いが異なる役割のために創造されたことを知らないようだね。君たちはそれぞれ違っているし、皆が個性を持っている。さあ、皆で手に手を取って私の方へ来なさい」と言う。この話の末尾には「こうして、地球が雨に洗われる度に虹が出るようになった。私たちも虹の色のように、お互いが異なり、それぞれに個性がある。これを理解して、調和を保たなければならない。イスラームの思想に現れた多様な解釈は、お互いに調和を保ちながら個性を見せている。これは神が人間に授けた恵みであるクルアーンの輝きのもとで豊かさと言えるだろう。この多様な解釈と宗派は、クルアーンにもとづいて、その輝きに照らされている限り、一つの虹となるのである」と説明が加えられている（Akgül（新実訳），pp. 87-90）。

このようにこの教科書では、イスラームに関する解釈の違いを否定的に捉えるのではなく、違いがあることを「豊かさ」として肯定的に捉えるべきと強調されている。

(2) 信教の自由を尊重する

「宗教を強制してはいけない」という項目では次のように述べられている。「神は、知性を備えた自由な存在として人間を創造した。人間は自由な意志によって宗教を選び受け入れる。ある宗教を信じ、それを受け入れることは、あくまでも個人の意志と選択によるものだ。自ら欲することなく何らかの宗教に入信し、その宗教的な儀礼を実践するように強制されることはない。人間は、その知性によって考えながら善

悪を判断できる。このため、神は預言者と聖典を送り、人間たちへ善と真実を教え、悪から遠ざけた。しかし、いかなる時も人間たちへ選択を強制することはなかった。これは、『宗教に強制はない。既に正邪は別たれている…』というクルアーンの節に明らかである。神は、その命令と忠告を伝えたが、これを受け入れることについては、あくまでも人間に任せている。人間は自由な意志によって自ら下した判断の結果を甘んじて受けなければならない。何らかの宗教を信じる、信じないは、あらゆる人間にとって自由である。（中略）これでわかるように、宗教の選択は、人間の自由な意志によって決定されなければならない。この選択について神と預言者は何の強制もしなかった。強制によって受け入れられる宗教、あるいは思想が存続することは不可能である。私たちの父祖も、『無理強いでも美しい結果は得られない』と言い残している」（Akgül（新実訳），pp. 85-86）。このように、「神と預言者は宗教を強制しなかった」として、イスラームが本質的に信教の自由を認める宗教であると述べていることも、多元的宗教教育と見ることのできる点である。

(3) 他宗教との共通点と寛容性を学ぶ

さらに「種々の宗教と普遍的な教え」という単元では、ヒンドゥー教、仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラームについて簡単に説明した上で、これらの宗教が共通に重視している原則があることについて述べている。これらの宗教の共通点として挙げられているのは、正しさ・清潔・善行と親切・年長者への敬意と年少者への親愛・動物愛護・環境を守ること・害のある習癖を避けること・他者へ害を与えないことの8点である。こうした共通点を挙げることで、他宗教に対する親しみを抱かせようとする意図が感じられる。

こうした共通点を挙げた上で、「他者の信仰に寛容であること」という項目では、次のように述べられている。

あらゆる人間がその人なりの信仰を持って

いる。人々は、信仰として受け入れた価値を神聖なものに見なす。人々は、各々の宗教と神聖な価値について敏感である。

私たちの信仰が私たちにとって神聖で貴重なものであるのと同様に、他者の信仰も彼らにとっては貴重なものだ。私たちは、自らの信仰に敬意が表されることや、信仰上の実践が楽に行えることを望んでいる。これは他者にとっても同様である。

イスラームは、人々が信仰と生活様式に対して寛容であること、信仰について誰にも圧力を加えないことを求めている。イスラームでは、何らかの宗教を選択することや、信じる、信じないが個々の自己に委ねられている。偉大な神によって「宗教に強制はない…」と宣言されているのである。つまり、全ての人間には信仰の自由があるということになる。

イスラームを認めさせるために、聖ムハンマドが何らかの圧力を人々へ加えることはなかった。彼は善行と美德によって人々を招いたのである。

歴史を通じてトルコ人が築いた数々の国家では、異なる宗教や宗派に属する人々が一緒に生活していた。統治下の人々が宗教や信仰のために何らかの圧力を加えられることはなかった。

それぞれに異なる各宗教の共同体が、アナトリアでは数百年にわたってお互いの信仰と価値に敬意を表しながら存在してきた。異なる宗教と信仰が混在する最も美しい例を成したのである。

今日の世界では、通信が発達して各国間の交流も盛り上がりを見せている。それと共に、異なる宗教と信仰を持つ人々の関係も増してきた。人々が、住んでいる国や置かれた環境の中で、自分たちの宗教や信仰を説明して認識を分かち合う機会は、昔に比べて増大したと言える。

ところが、一部の信徒たちが自分たちの宗教を紹介する活動は、彼らが暮らしている国の価値体系を見下して、完全に自分たちの信仰を植えつける闘争に様変わりしてしまった。

宗教の紹介ではなく、まるでプロパガンダを始めてしまったこの人たちは、人々の物質的および精神的な弱みにつけ込んで搾取しようとしているのである。こういった振る舞いは、宗教的な寛容、そして信仰に敬意を表す理解に反するものだ。個々の人々は、この類いの活動に対して良く注意しなければならない。

トルコ共和国は、政教分離、民主主義に基づく社会的法治国家である。いかなる国民も他の国民の信仰やその実践に干渉してはならない。法的にも干渉することはできないのである。全ての国民が信仰とその実践において自由であるからだ。(中略)

人々は宗教と信仰の自由を有している。そのためには、他の宗教と慣習や伝統にも敬意を表さなければならない。他者の宗教、慣習、伝統に敬意を表すことは、人々をお互いに近づかせて世界平和に貢献するのである(Akgül (新実訳), pp. 133-134)。

ここでも、イスラームが本質的に信教の自由を認めている宗教であることが述べられ、それゆえ、他者の宗教にも敬意を払わなければならないとされている。また、イスラーム統治下のアナトリアにおいては、数百年間も多宗教が共存する時代が続いたことにも触れ、イスラームの教えが信教の自由を認めているだけでなく、実際に多宗教の共存が長らく続いた実績があることも挙げられている。本質的にも実質的にも、イスラームは他宗教に寛容な宗教であることを強調し、他宗教に対する寛容の精神を持つことがイスラーム教徒にとっては当然のことであると述べられているわけである。

以上のように、トルコの宗教教科書では、違いを尊重すること、信教の自由を認めることの重要性が繰り返し述べられている。その意味で、トルコの宗教教育が多元的宗教教育の要素を含んでいることは間違いない。次節では、トルコの多元的宗教教育を相対化するために、イギリスの多元的宗教教育について扱う。

2. イギリスの教科書に見る多元的宗教教育

イギリスの多元的宗教教育については、宮崎(2013年)で検討したので、ここではその内容を引用しながら、イギリスの多元的宗教教育について述べる。

(1) 他宗教を学ぶ

イギリスの中学校レベルの宗教教科書では、キリスト教だけでなく、イスラーム、ヒンドゥー教、シク教、ユダヤ教、仏教の計6宗教を扱うのが一般的である。「6宗教それぞれに同じページ数を割くべきだ」という意見と、国教であるキリスト教に最も多いページ数を割り当てるべきだという意見が対立している」ことからわかるように、キリスト教以外の宗教は、少なくとも、付け足しとして補足的に扱われるような扱いではなく、教科書の重要な構成要素として扱われている(藤原, 2008年, 4~8頁)。

イギリスの宗教教育は、キリスト教だけではなく、イギリス国内に信徒の多い宗教についても学ぶことで、他宗教に対する理解を深め、多文化共生が可能な状況を作りだそうとしている。なかでも、ウォリック大学宗教教育研究所作成の中学校用教科書はその意図が明確である。以下では、この教科書の内容を引用しながら、イギリスの多元的宗教教育の内容を具体的に考察する。

(2) 他宗教の信徒に親しみを抱かせる

この教科書は宗教別に分かれているが、それぞれに中学生の4人の生徒が登場し、その4人の宗教や日常生活に関する考えを中心に教科書の内容が展開している。他宗教を信仰する同年代の生徒がどのような考えを持ち、どのような生活を送っているかを知ることが、他宗教に対する警戒心を薄め、親しみを抱かせることにつながるという意図からであろう。この教科書のイスラーム教徒たちを取り上げた部分から、いくつか例を挙げてみよう。

例えば、「日課」という単元では、イギリスに住む中学生のイスラーム教徒たちが、どのような1日を送っているのかを生徒の顔写真入り

で紹介している。「私は起きたらまっすぐ洗面所へ行って、顔を洗って、1階へ下りて、朝ご飯を食べて、それからまた2階へ上がって、着替えをして、制服を着て、髪を整えて、そして学校へ行きます。朝、先生に代わってお知らせを配ります。それは私の仕事みたいなもので、それから授業とかがあります。そして午後3時半に家へ帰って、アジア風の服に着替えて、お茶を飲んで、それからまっすぐモスクに行きます。そこに2時間半いてから家に帰り、晩ごはんを食べて、宿題をして、そして寝ます。そんなところです」といった紹介である(Mercier(穂積訳), pp. 14-15)。

この他にも、イスラーム教徒たちがどのようにに礼拝をしているのか、モスクでどのように過ごしているのか、クルアーンをどのように学んでいるのかについても、4人の中学生のイスラーム教徒の実体験を中心に紹介されている。

他宗教の信徒がどのような1日を過ごしているのか、特に学校外でどのような時間を過ごしているのかを知ることが、他宗教の信徒に対して、無知から生じる警戒心を和らげ、親しみを抱かせるために有効な情報である。少なくとも、例えば、単にイスラームの六信五行についての基礎的な説明をするだけよりも、イスラーム教徒の中学生がそれぞれについてどのように考えているかを紹介する方が、イスラームに対する親しみを感じることは確かだろう。

また、「ルーツ、言語、アイデンティティ」という単元では、イスラーム教徒の中学生が、ルーツやアイデンティティという点で自分をどうとらえているかを紹介している。例えば、「カムランは自分のことをこう表現します。『イングランド人、アジア人、パキスタン人、イギリス人そしてヨーロッパ人。みな同じです』。このように、イギリスに暮らすイスラーム教徒が複合的なアイデンティティを有していることを紹介することで、宗教や出身地が違っても、イギリス人としてのアイデンティティも有していることを認識させようとしている。他宗教を信仰する者もイギリス人としての意識を共有していることを認識することも、他宗教を信仰す

る者に対する親しみを抱かせるために有効な手段である (Mercier (穂積訳), pp. 38-39)。

このように、この教科書は、他宗教に対する親しみを抱かせることで、異なる文化を有する者の相互理解を促進しようとしている。

(3) 宗教の伝統や決まりを論理的に考える

さらに、この教科書では「学んだ内容を自分自身の疑問や関心に関連づけるようになることを狙い」としている。このことは、教科書の「教師用まえがき」に記されている次の言葉からもよくわかる。その言葉とは、「他の人の生き方に接することは、生徒自身の考えや生きる姿勢に影響を与える可能性があります。(中略)生徒が学んだことを次に自分の関心事に結びつけるよう配慮しています」という言葉や、『『よく考えてみよう』は、宗教的伝統から得た資料を刺激として、個人的に大切なことや関心のあることをじっくり考えてみるよう生徒に促すアクティビティです。ここでの目的は、疑問、問題、あるいは経験として遭遇したことがら—それらは個別の宗教的伝統に現れたものですが、同時に普遍的に重要でもあります—に照らして、生徒が自らの生き方や考え方について考える、もしくは再考するよう助けることです」という言葉である。この点に関連して、教科書の中からいくつか例を挙げてみよう。

「礼拝」という単位では、イスラーム教徒の中学生がどのように礼拝しているのかを紹介した上で、「自分に結びつけてみよう」という課題として、「あなたの学校での1日の中で、時間ごとにやらなければならないことは何がありますか？ 学校での日課をきちんとこなすために役立っているものは何ですか？ 日課や、そのような手助けがもしなかったとしたらどうなるのでしょうか？ 答えをパートナーと話し合ってみてください。イスラームで礼拝の時間が定められているのはなぜだと思いますか。答えを書いてみてください」が挙げられている。要するに、イスラームで礼拝の時間が定められているのは、日課をこなすために時間を決めることが役立つのと同様の理由からではないか、と生

徒自らが考えるように意図した課題が設定されているわけである。ただ単に「イスラームでは1日5回礼拝を行う」という知識を提供するだけの教育内容に比べると、日課の意義を自らの経験に引きつけて考えさせることができ、また、イスラームで1日5回礼拝の時間が定められている理由を自分なりに理解することができるという利点もある課題設定である (Mercier (穂積訳), pp. 16-17)。

さらに、「断食月と断食明けの祭」という単元でも、イスラーム教徒の中学生がどのように断食月を過ごしているかを紹介した上で、「よく考えてみよう」として次のような課題が設定されている。「断食のとき、ムスリムは多くのことをあきらめなければなりません。あなたは、テレビ、電気、チョコレート、水道、暖房、仲間、気持ちよいベッドなどといった、あつて当然と思っているものなしで生活をしたことがありますか？ そういふときのことを作文に書いて、それなしで過ごさなければならないとわかったときのあなたの反応を書いてください。あなたはその経験から何を学びましたか？ ときどきぜいたく品をあきらめることはいいことだと思いますか？ あなたの答えを注意深く説明してください」というものである (Mercier (穂積訳), pp. 50-51)。

断食に関する上記の課題も、「イスラーム教徒は断食月には日中飲食ができない」という知識を単に提供するだけでなく、自分に結びつけながら、断食のように我慢する経験をすることの意義を考えさせようと意図したものである。

このように、この教科書は、単に他宗教に対する知識を提供することだけを意図しているわけではなく、他宗教を学びながら、自分の生き方や考え方を再考させることをも意図しているのである。さらに、他宗教の伝統や行事、決まり事を知識として学ぶだけでなく、「なぜそのようなことをするのか。なぜそのような決まりがあるのか」という理由を論理的に考えることは、異なる文化背景を持つ者同士が相互理解を進める上で非常に重要なことである。なぜなら、伝統や決まりを固定的に捉えているだけでは、

結局のところ、お互いの伝統や決まりを一方的に主張する以上のことはできないからである。双方が「私たちの伝統はこうだから認めてください」と主張しあうだけでは平行線で何も状況は改善しない。「私たちがこういうことを大切にしているのは、こういう理由からです。この理由には一理ありませんか」とお互いに論理的に話しあうことによって、異なる文化背景を持っている者同士の対話が始まる。

要するに、異文化理解を進めるためには、自らの伝統や決まりを論理的に説明できるだけの論理的思考力が重要なのである。

以上のように、イギリスの宗教教科書には「他宗教について学ぶ」「他宗教の信徒に親しみを抱かせる」「宗教の伝統や決まりを論理的に考える」ということを重視しているという特徴があり、こういった点がイギリスの多元的宗教教育の特徴と言える。

3. トルコとイギリスの多元的宗教教育の比較

(1) 教科書の比較から

ここでは、トルコとイギリスの多元的宗教教育の相違点・共通点を整理しながらトルコの多元的宗教教育の特徴を明らかにする。

トルコとイギリスの共通点として挙げられるのは、自宗教だけでなく他宗教についても学ぶ点である。取り上げられる宗教も、トルコでは5宗教（イスラーム、キリスト教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教）、イギリスでは6宗教（トルコと同じ5宗教＋シク教）であり、シク教以外は共通している。ただし、他宗教を取り上げる分量は大きく異なる。トルコでは第8学年の教科書のうち1単元で他宗教について扱っているのみで他はイスラームについての内容が大部分を占めるのに対して、イギリスではキリスト教と同等の分量を割いてそれぞれの宗教について扱っている。

また、イギリスでは他宗教の信徒に親しみを抱かせることを明確に意図した内容がかなりの分量あるのに対して、トルコでは他宗教の信徒に親しみを抱かせることを明確に意図した内容は少ない。

イギリスで重視されている「宗教の伝統や決まりを論理的に考える」点については、トルコでもまったくないわけではない。例えば、クルアーンの一節を取り上げた上で、「この節に現れる『浪費』という言葉について考えてみよう。考えたことを友人たちと話し合いながら、それぞれの考えた方が異なる理由についても話し合ってみよう」というような課題が設けられている（Akgül（新実訳）、p. 76）。しかし、トルコの場合、こういった「考えてみよう」という課題は、あくまでもクルアーンや教科書の内容を理解するために提示されており、宗教間の相互理解を進めるために役立つ課題とは認識されていない印象を受ける。また、イスラームに関する内容が主となっているため、イギリスのように他宗教の伝統や決まりを論理的に考えることで、他宗教に対する理解を深める視点は欠けている。それゆえ、イギリスと比べると、「宗教の伝統や決まりを論理的に考える」ことで相互理解を促すという多元的宗教教育の機能は、トルコではきわめて弱いと言わざるをえない。

トルコの特徴として挙げられるのは、イスラームが本質的に宗教の違いを尊重する宗教であること、また、歴史的に見ても他宗教と共存してきた実績のある宗教であることを根拠としながら、（宗派・宗教の）違いを尊重することの重要性を強調している点である。

以上のようなことが、トルコとイギリスの宗教教科書の比較を通して言える。トルコではイスラーム（＝自宗教）を中心に学びながら、イスラームが（宗派・宗教の）違いを尊重してきた宗教であることを強調することで、他宗教に対する寛容性を育もうとしている。それに対して、イギリスでは、他宗教を学び、他宗教に対する親しみを抱かせ、宗教の伝統や決まりを論理的に考えることで、他宗教に対する理解を進めようとしている。こうしたアプローチの違いはあるものの、トルコの宗教教育もイギリスの宗教教育も、宗教間の共存が求められる多文化時代にふさわしい多元的宗教教育として評価できる。

(2) トルコとイギリスの多元的宗教教育の背景

トルコとイギリスの多元的宗教教育の違いが生じた背景と考えられるのは次の点である。

まず、国内的に見て、他宗教を学ぶ必要性が高いか低いかという違いがある。移民の増加に伴い、国内に多数の宗教的マイノリティを抱えることになったイギリスでは、宗教間の相互理解・共存を進めるためにも、他宗教を知り、理解する必要性に迫られている。それに対してトルコは、国民の圧倒的多数がイスラーム教徒であり、国内的には他宗教を学ぶ必要性は、イギリスに比べると相対的に低い。こうした違いが、多元的宗教教育に影響を与えているのは確かである。

また、トルコの場合、オスマン帝国時代に諸宗教が平和的に共存していたという歴史がある（鈴木、2007年）こともあって、イスラームが本質的にも実質的にも他宗教に対して寛容な宗教であるという自負があり、イスラームを学ぶことで多宗教が共存するために必要な寛容性を学べると考えられている。このこともトルコの多元的宗教教育に影響を与えていると思われる。実際、筆者が2013年にトルコ訪問調査を行った際も、「多文化時代においては、これまで以上に他宗教について学ぶ必要を感じないか」という問いに対して、「イスラームは多様性を認める宗教だから、イスラームをきちんと学ぶことが重要だ」というニュアンスの回答を何度か聞いた。こういった意識が多元的宗教教育のあり方に影響を与えていることは確かのようなのである。

(3) トルコの多元的宗教教育のゆくえ

トルコの宗教教育については今後のゆくえを慎重に見守る必要がある。というのは、トルコの宗教教育が多元的宗教教育の要素を含むに至ったのは、トルコ共和国成立後の世俗主義を巡る紆余曲折の経緯が大きく影響しているからである。国家原則である世俗主義と矛盾しない宗教教育のあり方が模索された結果、「宗教文化と道徳」の授業は、宗教・宗派の違いを肯定的に評価する多元的宗教教育の要素を多く含んだ内容になっている。

しかし、こうした宗教教育は、トルコ国内で必ずしも国民のコンセンサスを得たものではなかった。自宗教の信仰を深めるための伝統的な宗教教育を求める国民は多く、特にアラビア語とクルアーンへの学習に対するニーズは高い。そのニーズが満たされない状況が長らく続いたものの、2012年の義務教育改革に伴い、イマーム・ハティプ中学校が再開され、公立学校で宗教関連選択科目（「クルアーン」「ムハンマドの生涯」「宗教の基礎知識」）が新設された。

この改革は、従来の「宗教文化と道徳」の授業だけではイスラームの教育として物足りないと感じていた国民にとっては、待望の改革である。特に、国民のニーズが高かった、クルアーンとアラビア語の教育の選択肢が設けられたことの意味は大きい。共和国成立以来、世俗主義との関係で、公教育においてイスラーム教徒がイスラームのことを学ぶことに制限がかけられていたことは確かであり、その意味ではようやくイスラーム教徒が自らの宗教を十分に学ぶ教育を公立学校で受けられる道が開かれたと言える（宮崎、2014年）。

しかし、こうした改革に伴い、「宗教文化と道徳」の授業が、イスラームを学ぶ者にとっては中途半端なものとして軽視されてしまうような状況が生じる可能性も否定できない。もしそうなってしまった場合は、トルコの宗教教育において、多元的宗教教育の要素が弱まることになる。もちろん、これまで行われてきたトルコの多元的宗教教育が多くの国民に評価されていたのであれば、そういった状況にはならないはずである。その意味では、今後、トルコの宗教教育を巡る状況がどうなっていくのかは、これまでの多元的宗教教育がトルコに根付いていたのかどうか（多元的宗教教育の成果があったのかどうか、あるいは多元的宗教教育が評価されていたのかどうか）を検討する上で、慎重に見守らなければならない。

おわりに—多元的宗教教育と伝統的宗教教育

本稿で検討したように、トルコとイギリスの宗教教育は、多元的宗教教育の要素を含んでい

る。こうした多元的宗教教育は、従来、自宗教の信仰を深めるためになされてきた伝統的宗教教育とは、同じ「宗教教育」という言葉を使っているとしても、その目的・内容は大きく異なる。

本稿では多元的宗教教育に注目して論じてきたが、伝統的宗教教育が必要ないわけではない。実際、トルコでは伝統的宗教教育に対する国民のニーズは高い。ただ、多元的宗教教育に比べると、伝統的宗教教育を公立学校で行う必要性は低いと考えることはできる。

公教育における宗教教育の意味を考える上で注目すべきは、学校・家庭・宗教施設（教会、モスク、寺院など）のそれぞれが宗教教育に果たすべき役割は何かという視点である。学校に比べて、家庭や宗教施設が行うことが難しい宗教教育は、多元的宗教教育と考えられる。なぜなら、他宗教について学び、他宗教への寛容性を育むような宗教教育は、（自宗教についてのみ詳しい可能性が高い）家庭・宗教施設が行うことは難しいからである。それに対して、様々な宗教を信仰する者が共に学び多様な価値観を調整する場である学校は、家庭・宗教施設に比べると、相対的に多元的宗教教育が行いやすい状況にある。つまり、伝統的宗教教育は家庭・宗教施設が中心になって行い、多元的宗教教育は学校が中心になって行い、という役割分担を進めた方が、伝統的宗教教育と多元的宗教教育の双方を効果的に学ぶことが可能になるのではないか。

宗教教育といえば伝統的宗教教育を指していた時代には、「伝統的宗教教育をどこで行うか」が問題であり、家庭・宗教施設に宗教教育を任せ、（信教の自由に配慮して）学校では宗教教育を行わない、という対応も可能だった。日本・フランス・アメリカなど、公立学校で宗教教育を行わない国家は、この対応をとったわけである。しかし、多元的宗教教育という、これまでの伝統的宗教教育とは異なる宗教教育の必要性が高まってきた時代においては、伝統的宗教教育と多元的宗教教育の双方をどこで行うかが問題になってきている。この状況においては、学校では宗教教育を行わず、伝統的宗教教育と

多元的宗教教育をともに家庭・宗教施設に任せると、いう対応には無理がある。それゆえ、学校が何らかの形で多元的宗教教育に関与する必要性が生じている。

また、多元的宗教教育が学校で行われず、学校外で自宗教だけを固定的に学んだ場合、他宗教に対する寛容性が養われず、多文化時代に求められる相互理解・共存から遠ざかる危険性があることにも留意しておかねばならない。

以上のように、多文化時代において、学校が多元的宗教教育を担う必要性が高まっていることは間違いない。ただ、本稿で扱ったトルコの事例からは、これとは別の視点から多元的宗教教育の可能性を考えることもできる。というのは、本稿で論じたように、イギリスに比べるとトルコでは、「他宗教についてはあまり学ばずに、自宗教であるイスラームを学ぶことによって、他宗教を認める寛容性を育むことができる」という発想で多元的宗教教育が行われている。トルコのように「自宗教に含まれている他者への寛容性」を強調するような多元的宗教教育であれば、イギリスのように「他宗教を学ぶこと」を重視する多元的宗教教育に比べると、相対的に家庭・宗教施設でも行いやすい。そもそも、自宗教を学ぶことで他宗教への寛容性を育む教育は、これまでの家庭・宗教施設における宗教教育においても全く行われていなかったわけではない。だとすると、これから検討すべき課題として挙げられるのは、「自宗教を学ぶことで他宗教への寛容性を育むことはどの程度可能か」「他宗教を学ぶことでしか得られない理解とは何か」を検討しながら、学校と家庭・宗教施設が担うべき宗教教育の役割を具体的に考えていくことであろう。

また、自宗教を学ぶことで他宗教への寛容性も育むトルコの多元的宗教教育のあり方は、宗教間の平和共存の歴史があったトルコだからこそ行いうるのか（宗教間の紛争の歴史を背負っている国家では行うことは難しいのか）についても検討が必要である。トルコと同じく、イスラームが多数派宗教の国家の宗教教育において、多元的宗教教育はどうなっているのかを比較検

討することで、トルコの多元的宗教教育をさらに客観的に位置づけていくことも今後の課題である。さらに、今回取り上げたイギリスの宗教教科書が、キリスト教が多数派宗教の国家における多元的宗教教育のあり方を代表しているわけでもない。それゆえ、イギリス以外の国家における多元的宗教教育についても検討し、多元的宗教教育の現状と今後の可能性について考察することも今後の課題として残されている。

引用文献

- ・鈴木董『ナショナリズムとイスラム的共存』千倉書房、2007年。
- ・藤原聖子『教科書の中の宗教 ―この奇妙な実態』岩波書店、2011年。
- ・藤原聖子「イギリス宗教教科書解説」大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編『世界の宗教教科書』大正大学出版会、2008年。
- ・宮崎元裕「トルコにおける2012年義務教育改革―宗教関連選択科目の新設とイマーム・ハティプ中学校の再開に注目して―」『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号、2014年、21～30頁。
- ・宮崎元裕「多文化時代における価値教育の変容―論理的思考の重要性に注目して―」『京都女子大学発達教育学部紀要』第9号、2013年、37～44頁。
- ・宮崎元裕「多文化時代の宗教教育―トルコの『宗教文化と道徳』の教科書を事例に―」『京都女子大学発達教育学部紀要』第8号、2012年、165～174頁。

- ・宮崎元裕「価値観の多様化と宗教教育・道徳教育」『アジア教育研究報告』第6号、2005年、17～27頁。
- ・M. Akgül. et al. *Din Kültürü ve Ahlâk Bilgisi İlköğretim 8. Sınıf*. Feza Gazetecilik A.Ş., 2007. (新実誠訳・宮崎元裕監修「宗教文化と道徳初等教育第8学年」大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編『世界の宗教教科書』大正大学出版会、2008年)
- ・S.C. Mercier. *Muslims ("Interpreting Religions" series)*. Heinemann Educational Publishers, 1996. (穂積武寛訳「ムスリムたち」大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編『世界の宗教教科書』大正大学出版会、2008年)
- ・MEB (T. C. Milli Eğitim Bakanlığı), *12 Yıl Zorunlu Eğitim Sorular – Cevaplar*. 2012. (http://www.meb.gov.tr/duyurular/duyurular2012/12Yil_Soru_Cevaplar.pdf, 2014年11月4日アクセス)

謝辞

本研究はJSPS 科研費（若手研究(B) 課題番号：24730716)「多元的宗教教育の意義と限界に関する国際比較研究」の助成を受けた研究成果の一部である。また、JSPS 科研費（基盤研究(C) 課題番号：24520063, 研究代表者：藤原聖子（東京大学大学院）「ポスト多文化主義における公教育と宗教の関係」の助成を受けた研究成果の一部も反映されている。